

# 国際子ども図書館 平成 25 年度児童サービスワークショップ 「図書館でのおはなし会を考える」

日時 平成 26 年 3 月 4 日 9 時 30 分～12 時

構成

1. はじめに
2. 参加者の自館紹介：おはなし会の現状や課題
3. 講義：図書館での“おはなし会”について考える
4. 実践から学ぶ：国際子ども図書館おはなし会 DVD 視聴
5. 意見交換会：おはなし会の実際を知る・考える
6. 最後に...児童図書館員を支えるものは何か
7. 児童サービスワークショップの意義と成果

講師：汐崎順子氏（慶應義塾大学非常勤講師、学校図書館、公共図書館勤務経験あり）

## 1. はじめに【講師】

事前アンケートの内容を見ていると、参加者の低年齢化や減少、ボランティアとの連携などが課題として挙げられ、予想以上におはなし会を取り巻く状況が厳しくなっていることが見えてきた。

自分が蒲田駅前図書館に勤務していた時代には、職員とボランティアがそれぞれおはなし会を運営していた。

おはなし会は、子どもに出会う・子どもの本を知る・子どもと本を結び付けるといった役割があり、大切なものであると考えている。おはなし会を取り巻く状況について、「これ」という答えは出ないかもしれないが、ここでみなさんと考えてみたい。

## 2. 参加者の自館紹介：おはなし会の現状や課題【参加者】

### おはなし会の傾向、参加者の変化

- ・ 参加者数が減少していることが悩み。 ※複数の図書館から
- ・ 乳幼児向けのおはなし会は賑わうが、小学生向けは集まりが悪い。
- ・ 乳幼児向けの場合、おはなし会の時間に加えて、親同士の交流の時間が求められているように思う。
- ・ 乳幼児向けに、登録制のおはなし会を実施している。
- ・ 幼児以上の子ども向けには土日におはなし会を行っているが、乳幼児向けにも、正規職員（4人）で毎日おはなし会を行っている。
- ・ 15～20年ほど前にもおはなし会を担当していたが、その頃とは、子どもの層や親の考え方も違ってきていると感じている。

### ボランティアとの関係

- ・ ボランティアに任せっきりになっているので、職員として参加したいと考えている。
- ・ 月に6回程度おはなし会を行っているが、9割がボランティアによるもの。職員が参加しているのは1回だけで、その1回もボランティアと合同で行っている状態。
- ・ 職員とボランティアが交代でおはなし会を開催（一緒に入る形ではない）。しっかりしたボランティア協議会有り、関係は良好。
- ・ 月に1回、ボランティアとの勉強会を開いている。

- ・ 職員は人事異動があるため、経験年数の長いボランティアに押され気味になっている。
- ・ 初めはボランティアに押され気味だったが、連絡帳を作ったり、職員もおはなし会に入ったりして、現在は良好な関係を築くことができている。
- ・ 図書館内で行うことには職員が責任を持つ、という考えから、館内で行うおはなし会は職員が担当している。ボランティアの養成講座を開き、区内に派遣する人材バンクを立ち上げた。「図書館から派遣する」ということで、プログラム作成から練習まで職員が指導する。
- ・ こちらは逆にボランティアが集まらず、子どもも少なくなっているのが悩み。
- ・ 関わり方が難しい。中には、「時間をかけて図書館まで来ているのだから、最低2冊は読み聞かせしたい」と言い、乳幼児に対して30分も読み聞かせしようとする人もいる。
- ・ 実際の読み聞かせなどはボランティアが担当しているが、プログラムはボランティアと職員が協力して組み立てている。リハーサルなどにも立ち会う。特別なおはなし会（夏休み・冬休み）は職員が担当。

### 児童サービス担当者

- ・ 人事異動で、図書館以外の職場（学校など）から図書館に赴任してきた。または赴任から間もない（1～3年程度）。 ※複数の図書館から
- ・ 開館以来、読み聞かせを実施したことがない。担当できるような職員もいない状態。

### おはなし会のプログラム、内容

- ・ 図書館で行うおはなし会なので、本に無関係な出し物などは行わない方針。
- ・ 近隣の外国人向けに外国語のおはなし会を開催していたが、最近は日本人が参加することが多い。
- ・ 多言語のおはなし会など、内容や形式が様々なおはなし会を実施している。
- ・ 手話を使ったおはなし会を開催しており、近隣の特別支援学級などにも出張している。
- ・ 高校生が読み手として参加するおはなし会もある。

### 図書課施設・運営面での課題

- ・ 新しい図書館の建設を進めており、子どもへのサービスを検討しているので、おはなし会とは何かを原点から考えたい。
- ・ 施設内に読み聞かせできるようなスペースを確保したので、おはなし会実施はこれから、という段階。
- ・ 開館以来、おはなし会を開いたことがない。開館当初は児童室もなく、まだ開室して10年ほど。

### その他

- ・ 小学校の先生から「読み聞かせしてほしい」と要望が寄せられる。県内の市町村立図書館からも、研修してほしいとの要望が寄せられている。
- ・ 図書館だけでなく、学校ボランティアや近くの書店など、市内のいろいろな場所で読み聞かせが行われている。そのため、図書館に「読み聞かせに来てほしい」といった要望が寄せられることは少ない。おはなし会運営についての課題は、館内の会議でも非常によく議題に上っている。様々な取り組みを行いながら悩んでいる状態。（時間帯を変える、毎日開催、ゲリラ的に行ってみる、等）
- ・ 図書館とは別に、絵本を集めた施設があり、そこでおはなし会を開催している。
- ・ 図書館でイベントを行い（夏休みなど）、そこに参加した子どもを誘ったところ、高学年の子もおはなし会に参加してくれた。

### 3. 講義：図書館での“おはなし会”について考える【講師】

#### 図書館でのおはなし会の現状

自分が図書館員だったのはかなり昔のことなので、現在の図書館の状況とはそぐわない部分が出てきてしまうかもしれないが、おはなし会の意義や目的を、社会教育施設である「図書館」の役割と使命の中でとらえるということは、いつになっても変わらない真実であると思う。

現在は、参加者が低年齢化し、おはなし会自体も幼児向けが主流になってきている。25年ほど前に自分がおはなし会を担当していた時は、少しずつ乳幼児の参加者が増えてきて「乳幼児にも対応しなくては」と考え始めた頃だった。現在はさらに子どもの生活が忙しくなり、親の考え方も変わってきている。そのため、読書への入口に立つ子どもたちが、おはなし会に参加しない・できないという状況になってきている。

このように困難な状況ではあるが、変わらない部分や変えてはいけない部分を確かめる必要がある。現在は、ボランティアとの協働は必須かもしれないが、依頼する際にも方向性がずれないように、図書館員がサービスの目的や意義をきちんと理解した上で、イニシアティブをとるということは絶対に忘れてはいけない。

#### おはなし会の意義と図書館員が果たすべき役割

現在、「子どもの読書」に対する世間の声は大きいですが、本当に読書の意義、役割を理解した上で賛成しているのだろうか。

朝読、家読、アニメーション、ビブリオバトル、ブックスタート等々、さまざまな取り組みが、まるで「読書」というものを免罪符のようにふりかざして普及し、受け入れられている一方で、肝心の中身が問われない状況になっているのではないか。

「読書」が手段となってしまっているのが危ない。これらの動きは、本当に子どもと本を結べているのだろうか。

図書館でも、業務委託、指定管理者制度の導入など、「官から民へ」のアウトソーシングの動き、「市民協働」の形でのイベントが盛んである。指定管理者による運営などでイベント性が先行してしまうと、おはなし会の内容が問われなくなってしまう恐れがある。

図書館でのおはなし会の背後には、その図書館の蔵書が常にある。各館の蔵書構成が児童サービスの足元を固めているのだ。ボランティアにおはなし会運営を依頼する際には、ボランティアが楽しむのではなく、子どもの読書を図書館の蔵書につなげていく目的があるのだ、ということを知ってもらい、自分たちも忘れないことが大切だ。

読み聞かせが巧みだったり、語ることのできるおはなしの数は格段に多いなど、経験値や技術はボランティアの方が図書館員よりも上という場合も多いかもしれないが、「自分たちの（図書館での）おはなし会」をもっと意識してほしい。おはなし会は一人一人のボランティアの自己実現、自己満足の場ではない。あくまでも「図書館の目的を達成する為」のお手伝いをしてもらっているのだ、ということ姿勢として明らかにすることが大切だ。また「図書館の目的、児童サービスの目的は何か？」と問われた際には、きちんと理解してもらえるような説明ができなくてはならない。

図書館員の仕事として、子どもと本をつなぐことに取り組んでいるのだ、ということ各自の信念として欲しい。

勿論、ボランティアの中には、図書館がどういう場所で、図書館でのおはなし会にはどういう意義があるのか、ということきちんと考えてくれている人もいる。そういった人たちは、力強い味方になる。

松岡享子氏（東京子ども図書館理事長）が文庫の運営について書かれた英語論文（※1）に下記のような一節がある。

本の貸出以外に、多くの日本の文庫では、読み聞かせやストーリーテリングを行っている。文庫でこういう行事を行うのは非常に効果的であり、子ども達の本への興味を引き出し、本を読む力を育むのに役立つだろう。時には、本に書かれたことをもとに人形劇を上演したり、子ども達自身が演じたりすることなどが、図書館（文庫）の魅力を引き出すために行われることもある。しかしこういう催し物が、本の座を奪うようなことになってはならない。本はあなたの、図書館員の中心であるべきなのである。（講師による翻訳）

本の中には、子どもたちがしみじみと受け留める内容のものもある。上べの反応が良いものだけが「良い本」ではない。本を忘れたおはなし会、イベント性のみで子どもを集めるおはなし会になっていないかを考えたい。

子どもと本を結ぶこと、その本が子どもに提供するに値する本であることは、突き詰めると各図書館の選書、蔵書構成とつながる。図書館員が子どもに手渡す本は、必ず「選書」という過程を経ている。

もし自分達がおはなし会に日常的に関われないとしても、ボランティアが「図書館の活動」としておはなし会を行っているのであれば、「どんな本を選び・どのような形で子ども達に伝えているのか」をしっかりと知っていかなくてはならない。ボランティアがどんな本を読んでいるのか、チェックすらしないのは、責任放棄ともいえる。

### おはなし会で“子どもを知る“、”子どもの本を知る“

おはなし会は参加人数などで図られてしまう部分もある。そういった統計上の数を謙虚に受け止めて、「なぜ子どもが来ないのか、低年齢化しているのか、おはなし会が貸出に結びつきにくくなっているのか」などの原因を考え、解決方法を探ることも、もちろん大切だろう。

しかし一方で、数だけを見て、個々の子どもたちを見ないようになってはいけない。

おはなし会は、ギブだけでなくテイクもある。図書館員の側が子どもたちから学ぶ良い機会である。おはなし会は一人一人の子どもの姿をきちんと捉え、今の子ども達が何を、どう受け止めるのかを知るために、そして子どもの本を知るための多くの材料を提供してくれる場でもある。

ちなみに私自身も実際は、「子ども時代の絵本の経験」が薄い。大人になってから、図書館員になってから数多くのすぐれた絵本に出会って知る機会は得たが、子どものようにじっくり読むことはできなかった。経験値の薄さを補うために、職業としてとにかくたくさん絵本を「こなすこと」に力を注ぎざるを得なかったが、唯一自分が「絵本」をじっくり楽しむことができたのは、同僚がおはなし会で絵本を読むのを聞き手として受け止めた時だった。まさに「読んでもらって面白い」という経験をした。

おはなし会に聞き手として入るのは難しいかもしれないが、時にはこういう経験を持つことは大切なのではないだろうか。

石井桃子さんがかつら文庫を開設したのは、子どもの本の作家、編集者、翻訳者として「子どもたちが、どんな本をどのように読むのか」を実際に知らなくてはならない、という思いからだ。た（石井桃子『子どもの図書館』 岩波書店 1965 より）

こういう姿勢が、まさに今の図書館員に求められているのではないか。おはなし会を通じて、知る・学ぶ・考えることこそ、図書館員が仕事として取り組まなくてはならないことだと私は思う。そのために、子どもの数が少なくても、本やおはなし・子ども、子どもの姿を知るために、おはなし会という場は必要である。

子どもを知ること、一人一人の子どもに接することについて、『こどもの図書館』（2012.7）の記事（※2）を

紹介する。

これは「ぬいぐるみといっしょのおはなし会&ぬいぐるみのとしょかんおとまり会」の実践報告だが、ここで注目すべきはイベント性ではなく、一人一人の子どもに本を手渡すことの大切さに気付いた、という点にある。このイベントが有効ですよ、やってください、という意味で紹介するのではない。

この取り組みでは、30組以上の子どもに対し、「ぬいぐるみたちが持ち主の子どものために本を選んだ」という形で図書館の本を複数冊紹介し、手渡している。事前にぬいぐるみの種類などを申告してもらい、さらに子どもの年齢、図書館の利用の様子などから、各自の好みを類推して本を選んだ、と書いている。子どもを集団としてとらえるのではなく、個々にどんな本を手渡すかを大切にする企画になっている。

こういうイベント性が高い取り組みでも構わないと思うが、それをきっかけに一人一人の子どもを見て本を手渡すことまでを考えてほしい。

#### ※1

Bunko: A unique scheme to bring books to children.

Newsletter/Unesco Regional Centre for Book development in Asia 1976 April 18(2) p8-11.

#### ※2

市川純子 「ぬいぐるみといっしょのおはなし会&ぬいぐるみのとしょかんおとまり会」を実施して - 横浜市磯子図書館の事例から

『こどもの図書館』 2012年7月 Vol.59、No.7 p2-3

## 4. 実践から学ぶ：国際子ども図書館のおはなし会 DVD 視聴

### 国際子ども図書館のおはなし会概要

開催日：土日の午後（14：00と15：00の2回）各回約30分

対象：4歳～小学校1年生まだと2年生以上の年齢別

担当者：話者とサポートともに国際子ども図書館職員

### 手順

#### ・ 事前練習

担当者は、事前に過去の例などを参考にプログラムを組み立てておく。

当日午前中にリハーサルをし、お互いのプログラムを確認する。リハーサルは、おはなしと絵本の組み合わせが妥当かどうか、アクセントチェック、本の持ち方などを指摘しあう研修も兼ねている。

#### ・ 当日

プログラムは、手遊び・わらべうた、ストーリーテリング、絵本の読み聞かせ（メインとおまけの2冊）等で進行する。

終了後は子どもたちに、その日のプログラムを印刷した紙と、スタンプカードを渡す。

#### ・ 記録

プログラムや子どもたちの様子などを記録した用紙を課内で回覧する。

記録は紙に手書きする方式だが、プログラム内容のみエクセルの表に入力し、検索できるようにしている。

### 視聴したプログラム

1. 手遊び・わらべうた 「ひとつとひとつで」
2. ストーリーテリング 「あなのはなし」(『おはなしのろうそく 4』 東京子ども図書館)
3. 絵本の読み聞かせ (1) 『だいくとおにろく』(松居直：再話 赤羽末吉：画、福音館書店)

4. 絵本の読み聞かせ (2) 『もけらもけら』(山下洋輔:ぶん 元永定正:え、福音館書店)
5. 手遊び・わらべうた 「さよならあんころもち」

【講師】国際子ども図書館の職員は、児童サービスの専門トレーニングをしてきた職員ばかりではない。都立多摩図書館で行っているおはなし会(後述)もそうだが、業務として、おはなし会のモデルケースという位置づけで取り組んでいる。

今回視聴したプログラムは、ストーリーテリングは外国の創作話、絵本は日本の昔話、おはなしと絵本に集中して子どもたちが少し疲れたところで、一緒に声を出して参加できるような絵本を選んでおり、よく構成されていると思う。

【都立多摩図書館】4年前から、登録制・一年間継続の乳幼児おはなし会を運営している。

対象となるのは、4月時点で満1歳～満3歳の子ども20組。月2回(年間22回)で、一年間通うと子どもも変わるし、何よりお母さんが大きく変わる。最後の回では「おおきなかぶ」の人形劇をするが、子どもの集中力がすごい。大体がリピーターになる。

【講師】継続して子どもが来るイベントを企画、実施するのは大事なことである。全ての子どもたちが潜在的な力を持っているが、子どもの読書能力は、大人の支えがあって育っていく部分がある。読書に向き合える子どもを育てていきたい。

都道府県立図書館は、市区町村立のバックアップをするモデル図書館としての役割がある。こうすれば子どもたちがこう反応する、というモデルを、説得力をもって伝えていく必要がある。

## 5. 意見交換会：おはなし会の実際を知る・考える

### ① 開催形式

- ・ 事前アンケートでは、参加24館中15館が「おはなし会を実施している」と回答した。
- ・ 小学生向けの会を実施していない図書館でも、乳幼児を対象としたおはなし会を行っている場合が多く、図書館でおはなし会を開催するのは当たり前と考えられていることがうかがえる。
- ・ 年齢別に細かく設定すると、適正な内容でおはなし会ができる。その一方、1回あたりの参加人数が減ってしまったり、おはなし会の実施回数が増えて担当者の負担が大きくなる、といった問題もある。

### ② 曜日

- ・ 平日ではなく、土日を中心に開催せざるを得ない。土曜日、日曜日に開催している館がほとんど。
- ・ 職員が担当している場合、土日にも必ず誰かが出勤して対応している。むしろ、土日に開催できない館はない。
- ・ ボランティアに土日のおはなし会を担当してもらっているが、ボランティアの都合がつかない場合は、急遽、児童担当の職員が入ることもある。

### ③ 参加者

- ・ 大人も参加できるという図書館がほとんどだった。
- ・ 年齢ごとに、大人が入れる会(3～4歳)と入れない会(5歳以上)を設定している館や、初めておはなし会に入る子どもは1回だけ付き添い可にしている、といった館がある。
- ・ 逆に、親が「30分だけでも子どもを預けたい(離れたい)」と思って連れてくるケースもある。

【講師】大人が入れるおはなし会が多かった。参加者の低年齢化が関係しているのだろうか。

「一人でおはなしが聞けるようになったら入ろうね」という尺度も、子どもの一つの「成長」と捉えることができる。子どもがおはなし会を楽しむ姿を大人（親）に見てもらうのも良いが、子どもたちだけの会には「おはなし会のかたまり」という独特な雰囲気があるように思う。大人も入る会が当たり前ではなく、子どもだけのおはなしの空間を作り、そこに一つの世界ができることを知っておくことも大事ではないか。

#### ④ 会場

- ・ 専用の部屋がないので、おはなしの空間が確保できない。

【講師】おはなしの世界は、現実とは別のところにあるものなので、区切られた場所があると良い。最近建った図書館にはおはなし会用の部屋を備えているものが多いが、そうでない館もある。そういう場合は、今ある施設内でスペースを区切れるような工夫をしていくことも必要ではないか。空間を確保するために、カーテンで区切ったり、階段を臨時のおはなし会の会場として使ったりしている例もある。

#### ⑤ プログラム

- ・ プログラム作成をボランティアに任せている図書館もいくつかある。
- ・ ボランティアには、おはなし会の 30 分前にプログラムを申告してもらっている。（ただし、担当しているのは 20 年以上おはなし会を任せている団体で、実績がある。）
- ・ ボランティア側からの要望で、職員もおはなし会に入るようになった。

【講師】おはなし会は、（業務外の）プラスアルファのイベントではない。業務として胸を張ってやるべきことであり、周囲にも理解してもらおう事が大切だと思う。

#### ⑥ 担い手

- ・ ボランティア内にも派閥がある。
- ・ 善意で協力してくださっている方々なので、なかなかこちらの要望を強く言えない部分がある。
- ・ ボランティアへの研修が必要でも、その研修講師自体を、ボランティアの中で一番経験のある人が担当している。
- ・ 月 1 回、職員とボランティアで勉強会を開催している。
- ・ 職員からでは伝わりにくいことも、外部講師から客観的に説明してもらおうと受け入れられやすい場合がある。
- ・ ボランティアから、絵本を使っておはなし会用のペーパーサートや紙芝居を作りたいという要望が出ることもあるが、そのようなものを作ると著作権を侵害してしまう。著作権問題は伝えるのが難しい部分があるが、勉強して、「本」をきちんとした形で伝えられるようにしなくてはならない。  
「著作権を守らない行為を子どもが見てしまうと、その真似をしてしまう。子どもを違法行為に巻き込むのはいけない」と説明している。

【講師】出版社や著者も、自分たちが出版した本・書いた本がどう使われているか知りたがっている。良い関係を持ってほしい。

また、ボランティアとの勉強会は、図書館側の考え・想いを伝える大切な場だと思うので、続けてほしい。

#### ⑦ 記録の活用、さまざまな取組・工夫など

- ・ 継続的な参加には、スタンプカードの力も大きい。

【講師】 アンケートを見ると、スタンプカードを使っている図書館は多い。スタンプを集めることが主になってはいけませんが、最初はスタンプ集めが目的でも、段々おはなしが聞けるようになってくる子どももいる。おはなし自体を楽しみ、結果としてスタンプがたまっていく、という方向に変わってくる。

身の回りに楽しいことが沢山ある今、「読書」という「自分の力を使わなければ得られない楽しみ」に対しては、例えば「スタンプ集め」という楽しみなどがないと、なかなか読書に結びつかない。図書館員もこういった面、今の子どもたちの状況を考えて、もう少し心を柔らかくする必要があるのではないかと思う。

#### ⑧ 提示された問題・課題

- ・ 低年齢化、子どもが集まらない傾向がある。

【講師】 まず、目の前の子どもを大事にしてほしい。また、乳幼児のおはなし会では、その子どもが成長しても継続して図書館に来ることは大事なことで、とうまく伝えられないだろうか。

子どもがいる場所、例えば学校などにアウトリーチで出かけて行き、図書館の利用へとつなげていくことも必要だ。読書、図書館利用の継続は、子どもたちの成長に結びつくのではないだろうか。

### 6. 最後に...児童図書館員を支えるものは何か【講師】

古典的で評価の定まった作品、読み継がれた作品（文化）を手渡すこと、良い本だが実際にはなかなか子どもが手に取らない本を手渡すことは、図書館の大切な仕事である。そのためにまず図書館員が、その本の良さをきちんと分かった上で手渡さなければならない。

おはなし会についても、「おはなし会とはこういうものだ」という自分なりのイメージや理想を持った上でやっていくことが大切である。

自分が図書館に勤務している時には、「この図書館の蔵書を背負っている」という想いを持っておはなし会を運営していた。

図書館員は対象である子どもと、子どもの本を知らなければ、責任をもってサービスができない。子ども時代に良い本を読んだ人は、良い読書体験を語ってくれることを今、大学で教えていて、学生たちの話を聞き、実感している。

本を手渡した子ども全員ではないかもしれないが、おはなし会で本を紹介することは、良い読書体験の種を撒いているということを忘れないでほしい。

### 7. 児童サービスワークショップの意義と成果

短い期間での異動や図書館業務の繁忙、指定管理の導入等に伴い、おはなし会に限らず、児童サービスの専門的知識の継承と経験の蓄積が難しい状況であることが、参加者全体の傾向としてとらえることができた。事後アンケートでは、他館の状況など情報共有ができて有意義だったとの回答が多く寄せられていた。また、ワークショップ終了後も、参加者の多くが会場に残り、積極的に情報交換する姿が見られた。

国際子ども図書館のおはなし会に関するノウハウの蓄積を全国に発信するなど、児童サービス関係者に役立つ情報を今後も提供していきたい。